

松波むかし語り ここに住み続けて

その 49

今回のお客様

松波町会の前副会長

いしだ はじめ
石田 甫さん 76歳 4丁目

“街のしごととはムリせず愉しく、創造的に、そして自分たちが主役だと思ってやりたいですね！”



石田さんは昭和 13 年、当時の東京市荏原区(えばらく)、つまり今は東京都品川区になった東中延で生まれました。子ども時代は戦争と背中合わせ、お母さんの田舎であった宮城県の松島へ縁故疎開させられ仙台空襲を遠くから眺め、小学校 2 年のときに中延に帰ってきたら、あたりは焼け野原だったという強烈な印象があると云います。

戦争が終わり木更津を経て昭和 26 年、中学 2 年生のときからの松波の住人です。「当時の松波は、先代の県営住宅の 1 棟めが建った頃で、千葉商のグラウンドには囲いもなかったですね。我が家の周りは畑が多くて、下肥の香りが豊かでした(笑)」。まだ町会の組織はありませんでした。「家数が増えていく時代でしたから、『町会をつくらなければ』という声も大きくなっていったんでしょう、たまたま父が新聞社に勤めていたため頼りにされたようで、よくいろいろな人が家に相談に来られてましたね」。

昭和 31 年に入った大学生活の一番の思い出は、「学長退陣」を求めた学内ストライキだとか。「のちに日野自動車の社長になる学友が委員長、ぼくが柔道部で威勢がよかったからか行動隊長でした。ひょんなことから学長を退陣させてしまったのですが、その頃からぼくは行動派だったんでしょうね」。学生運動という言葉がまだ珍しい時代の話です。



新開発キャップレス万年筆

卒業して、石田さんは万年筆で有名なパイロットに入社、卒業や入学の記念品はだんぜん万年筆だった時代でしたが、ここでテレビCMでも記憶されるキャップレス万年筆の開発を手掛け有名な賞も手にします。「狭い万年筆の内側に、どうやったらインク漏れの起きないペン先を仕込むかに苦労しました」。55 歳でサラリーマンを退職するまで、石田さんは、いくつかの企業に変わりますが、技術屋としてアイデアにあふれた製品開発に情熱を注いできました。「例えばおもちゃの開発は、生活の先取りなんですね。いまではお掃除ロボットまで活躍していますが、当時は人の声を認識する装置ができてましたから、それを使ってロボット犬を開発できないかとか……」。折り畳み自転車、ベビーベッド、歩行器とどんどんアイデア製品の説明が登場する最後は、「水が枯れたら『水をちょうだい』という植木鉢の開発」なども飛び出して、自身も「酒の席でもアイデアがどんどん出てきますから、明るい酒呑みですね」。この調子でアイデアを出し続け、パテントも多く手に入りました。

退職後、町会の理事を 1 年務めたところで、寝たきりのお母さんの介護にあたりました。「ヘルパーさんも頼んでみたけれど、かゆいところに手が届かない。それで自分でやって、最初は涙が出たけれど、『愉しくやらなきゃ長続きしない』と思い返して、遊び心をもってやることにしたんです」。町会活動についても「いかに愉しく、合理的にやるか」が石田さんのモットー、区長を 2 年、副会長を 3 年務めるうちに、松波 2 丁目歩道橋のペンキ塗り替えを求めるなど、「センスのいい街を次の人たちに残したいから」と石田さん独特の目配りを働かせてきました。「言われたからやるのではなく、なるべくみんなが主役になって仕事をやってもらう、生きがいのマネジメントでしょうか」と笑って語ります。(竹)